

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2016.10



平成28年10月1日発行(毎月1回1日発行)第64巻第10号

No.701

# 地 中 海

一〇一六年一〇月号（通巻七〇一号）

◇シルクロード・カフェ

（責任編集）木村文子

◇今月の二十首詠……第三日曜日

川野知美 2

私と短歌との出会い（170）

田中純子 19

■作品[A]

椎名恒治・鈴木結志他

篠原日出子他

A

田土成彦・千葉む津

A C B A

齋藤進他

B

田口紀久子・高原桐

末廣久恵他

村石けさ子他

C

市原やよひ・松瀬トヨ子

■オリーブ集

佐川久光他

B

木村恵子・西畠睦子

□糸杉集

柴田登志恵他

A

朝井恭子

◇今月の二人

藤野喜美子・森川淑子

A

久我田鶴子

■松永智子歌集『川の音』批評

40

田土成彦・千葉む津

久我田鶴子

老いてうたう  
ひとりの間へ

阿木津英

田口紀久子・高原桐

久我田鶴子

■梅本武義歌集『仮眠室の鳩』批評

44

市原やよひ・松瀬トヨ子

久我田鶴子

微笑ふたたび  
ユーモアを生きる力に

爲永憲司

福田庸子

朝井恭子

■浜谷久子歌集『風笛』批評

48

木村文子

久我田鶴子

受け入れる力  
心を尽くす人

三好聖三

藤田美智子

久我田鶴子

クリップ……  
120

神田通信……  
表3

## 第三日曜日

川野 知美

昭和三十三年生まれ。  
森の会所属。  
合同歌集に「天舞」がある。

ミッキーの買い物カートに子ども乗せ父親は歩く子ども服売り場

着ぐるみのアンパンマンが子に話す「大きくなったね」知人のように

幼子はアンパンマンの赤き鼻赤き頬つべをベンベンたたく

ドラえもんの青きカートに男児乗りハンドルを切る脇目もふらず

少子化と呼ばれる時代にこの子らは愛情もお金も注がれいるか

ハイヒールと黒ずくめの服にパナマ帽 片手に一歳児を抱く女性

デパートの紙袋六こ両手に下げポーターのごとく父親つきそ

あの人もこの人も幸せそうな百貨店六階の子ども服売り場

父親の胸に抱かれて乳のみ児は頼りなき足だらりと下げる

留め置きのベビーカーの中覗き見れば乳児のけ反りへらりと笑う  
満席の資生堂パーラーに順番を待つ人の列壁ぎわ埋める

メニューにはさくらんぼパフェ千六百円もう店出られぬ水運ばれて  
銀色のシュガーポットに真白き砂糖をくうさせさらさら

バニラなる黒き点々のみ残りクリームブリュレ食べ終わりたり  
子のためよ孫のためよと文明は進化し続けるものなのだろうか  
子どもらの未来に使う日本語はコンピューターに変換される

六月の第三日曜父の日と知りつつ自分の買い物をする

人ごみに右側通行の流れあり逆らわず行くあてなき買い物

帰りは八時夕食いらぬとメールあり ひとりで御馳走食べて帰ろう  
欲望も諦めもみな知ることく幼子の目がわたしに刺さる

# 作品 A

椎名恒治 炎帝

・橋

朝六時われの歩行の先々にこゑ憂し憂しと蟬の鳴き出づ  
七月三十一日校門はまだ開かざる道遠回りして投票にゆく  
むかし兵營のありしこころ学校病院公園それ古りてさま變りゆく  
住みつきて半世紀経つ新しき高層次ぎ次ぎ建ちて囲まる  
三十度を越ゆる炎帝になづきまで葵えゐてわれのまだ生きてゐる  
古き雑誌「けやき」がいつこにひそみゆしや渡辺利文歌集特集  
香川進山本友一満州の思ひ出語る利文の歌集に寄せて

鈴木結志

鍊祝い

・福

関根榮子

雷鳴

・埼

世木田照比古 曽孫

・茜

怪物の顔でがおがおと我を襲う幼は園での不快晴らすか

俊敏に動けぬ老はもの足らず幼は吾を無視し始める

「ボイ」と言い何でも捨つる幼児のごみ箱より吾は干物を拾う

泣き叫ぶおもちゃは投げるすぐ眠る思いのままの幼を葵む

頼まれて野菜パン二個を購えど確かめ確かむ曾孫の物ゆえ

「昔はこれ程暑くなかった」と自らが招きし温暖化を人は嘆きぬ

門下生が書のコンクールに入賞す共に喜ぶも吾の生きがい

忙しさに作人の見ざる葛の花路肩一面渡り延い咲く

夢のみの滻瀬はさみし物語りびなんかずらの花の恋うた  
花を見ず摘むには惜しも茎葉の敵にあふれて植え替え時ぞ  
死なばみな灰にされゆく人の世にせめてうた詠み己を満たす  
鎌祝い時の移りに消えゆくを惜しみてひとり名残り酒酌む  
収穫を終えて大の字に寝る須臾の安らぎ情報いらぬ

全山の紅葉に焼けどする程の火男となりうた紡ぎゆく

眼れざる真夜に聞きいる飛行音北へ行くらしたちまち遠のく  
上海より昆明へと乗りし夜間飛行真闇の窓外思い出し眠る  
生い茂る暑き草むらと見て来しが今日は涼し氣に擬宝珠の花あり  
猛暑日の昼餉に茹でし素麺に茗荷、青じそ、オクラを刻む  
昼暗み雷雨くるらしさわざわと道辺の荒草そよぎ始めつ  
息せきて道を急げり稻妻と雷鳴の間隔に距離はかりつつ  
遠廻りしてみる家は友遊きて無人の十年夏椿咲く

## 関根和美

符号

・埼

## 佐久間晟

山毛櫸（一一一）

・湾

いくつもの符合のうちにわが愛の靈名ひとつ授からんとす  
感情のうずまくところ離りきて高きを仰ぐ集いやすけし  
タガロゲ語ハングル英語ベトナム語フランス語さざめく御堂の内に  
異国より来て働く困難を聞きつつ異国に住む子を重ぬ  
こここそは原初なるかなはじまりを覚えてふかく祈る座にあり  
追放の船に彼のひと見てしより漂いきたるわが魂なりや  
聖き人とりつきたまえ罪深くあり経るこの身きよめたまえな

## 坂上直美

祇園会

・天

祇園会やさざめき歩く少女子の浴衣姿の髪の後れ毛  
祇園会や藍の浴衣の少年のギュッと眉寄せ笛たかく吹く  
鉢町の鉢それぞれに謂れあり語る翁の誇りかにして  
放下鉢厄除けちまき賜わりぬ蘇民将来守り給えな  
来年もその次の年もまた次も街平和なれ夏に鉢あれ  
京の街大船鉢は今し建つ龍首しつかと空を見据えて  
空高く雲を突き刺す長刀の鉢進み行く惡靈よ去れ

## 坂出裕子

草刈り

・洛

朝明より汗を流して草を刈る仕事といふにあらずたのしみ  
刈りとりし草のかさ見て刈りとりし土のひるがり見つたのしむ  
刈りて伸び刈りて伸びたる草原の草を刈りつもう何十年  
朝起きて鎌をとぐのももどかしく空地に向かふ草の伸びたる  
刈りあとにすぐ伸びて来る草を刈る何をしてゐるのかわからぬ  
私のしてゐることは所詮この程度なるらむなべてひと生の  
ひと仕事終へし気分でとる朝餉たれも貰めてはくれないけれど

## 佐久間すゑ子

耳しい

・湾

日暮れに鳴くカジカガエルの透明な笛の音に今日も癒されている  
何も無い木の影だけのブナ森に人生という慾さを重ね  
師の夫妻すでに亡き今ただただに拋り行くはブナの巨木の生きか  
まつわれるわれの不安は何ならん何に寄り添い誰に縋れば  
この世とは木の影だけの世界かもブナ森深く入りゆけど「風」  
答えなきブナの沈黙は拒否なるやわれはわれなり、しかし私とは  
人生とは何も無いことかも、そして静かに死を待つことなのかも

## 佐藤道子

今昔

・甲

半世紀夏を過して故里となりし信濃の黒土嬉し  
植ゑてより三年を経ちし山の萩小さきままに葉の美しき  
リスの子の食べ残しあどんぐりの落葉の中よりそいこに生ふ  
妹の若かりし頃にそつくり姪と話せば老を忘るる  
一昔二昔のこと話しをり浅間の煙細く上るを  
かすかなる軍靴なりしをカツカツと響かせ始む内閣改造  
ボケモンゴー、ゲーム感覚戦争へ誘はれゆくか若人達は

高尾恭子 夏

・大

竹下妙子 八月

・霧

立ち止まることの難さよ四十年すこしは夫と同じく夢む  
色あせたビーチパラソルばたばたと来し方とおき記憶になびく  
復習のように湖畔の街めぐる青春18きっぷの旅は  
汗水に汗を流せばばんばんをはたきくれば祖母といだ夏  
またひとつ計報どきぬクマゼミの不協和音の高鳴りやます  
浜田さんが五分遅れて来てくれそな月例歌会の戸外は暗れて  
今しばしきマゼミな鳴きそ新しき朝のめぐりに手をあわせおり

高津砂千子 梅

・風

田土成彦 水筒

・宙

いっせいに蝉の鳴き声なだれくるあさ一番に窓を開ければ  
十キロの梅ていねいに漬けこみぬあの人この人思いうかべて  
梅干を夜露に当てんと仰ぐ空ひときわからがやく星三つあり  
紫蘇の葉を揉みて浮き立つわが指紋去年よりはつかうされたような  
肥やらす水やりもせぬ赤き薺見てよばかり五つが開く  
ひわの種鉢に埋めて三年日酷暑に負けぬ葉のびんびんと  
カンナカンナ 真亦なカンナに会うために遠回りする本屋への道

高橋和代 忌の八月

・桃

田土才恵 サマーキャンプ

・宙

揚羽舞ひ忌の八月のめぐり来ぬ蟬も加はりわれを急き立つ  
七回忌修せられたりわが病の進み遅きが助けとなりて  
忌に合はせ鳴きたつ蟬のこの年は一日のみなりし命の思はる  
次の忌は差配なせぬを見越して仏事もろもろ申し送りす  
離れ住む姉妹の共に孫を得て久ひさの逢ひにはづみて居りぬ  
独り居の淋しさにテレヒ見る習ひチャンネル交ぶるもりオ、リオ、リオなり  
病弱に生れスポーツに縁遠くリオもメダルも目端を素通り

宵よひのはざまに深き天の川真うへに澄みて秋ちかみゆく  
桜として征きたる兄も花ひらの筏に乗りて還る八月

熊蝉は猛きものふ全山を決戦場と焰して鳴く

茜より藍へと変はる西の空蝉かなしげに鳴くか たそがれ  
夕づけばじじつと鳴きて蟬の落つ生の終りの詩なりしかも  
丈高く咲き並びたる鬼百合の黒き斑点に夏深みゆく  
秘めごとを明かすがごとく蕾ときほの揺れて咲く白き夕顔

## 辻 無生

製鉄所見学

・春

## 中島義雄

銀漢

・岡

西日本製鉄所の見学に足はこび竦む奈良老人会

瀬戸の海運河となして製鉄所 最先端の工場火にうごく

煙突無き奈良に住みたる老人たちテクノロジーを目の前にする

人間の見えず運ばる真つ赤鉄見学という眩暈に立ちたり

こえならぬ息を吐き見る転炉の前ダイナミックに動く工場

リサイクル新し鉄の事業化・無限にせまる倉敷の地は

テクノロジーそっぽに生きて日の前は地球にやさしい製鉄所見学

## 塔原武夫

塩の味

・湾

名を問うに「じらん」と紫蘭はさわやかないと示し風に告げている  
 クイズ解くことも慣れて時すごす脳鍛えんと哀れ老いゆく  
 ふくらみし葡萄を狙うカラス等はカアと鳴きては人を見下す  
 夢にみる姉兄等みなすこやかに吾を呼ぶさまほえみを持つ  
 生きるとはさびしさに耐え嗜みしめるひと切れの鮭の塩の味する  
 芽生えたる青紫蘇の芽のたくましさキチキチバッタの仔を遊ばせて  
 くちなしの花白じろと間に浮く七月日夢など語る

## 中島央子

半夏生

・森

扁額に「春夏秋冬花不斷」かかる向島百花园

重ね来し歳月みせて自づから神さびて立つ木の神野の神

甘酒の暖簾を横目にうた言葉さがす小径をゆきつもどりつ

咲きのこる菖蒲一花ゆるりと紫ほどく茎の直立

生涯にどれ程の距離あるくのや紫陽花の葉を這ふかたつむり

もう少し歩きてゆかなゆつくりと河骨の黄の見ゆる岸まで

樹々の上にスカイツリーの尖塔をひととき見せる半夏生けふ

天頂に賑はひて天の川流れ残業の子が疲れて帰る

復員の無蓋車に揺られて仰きたる銀漢は呆と照りてゐしのみ

一筋の過疎の町並みに灯は暗く柱のことき天の川頭つ

「うつくしや障子の穴の天の川」一茶が見たる世の天の川

小さな盆踊りの輪が散りゆけば銀河が静かな光りを戻す

盆礼に人の行き來の賑はひし昭和を懷い啜る素麺

迎へ火も送り火も焚かねど享け給へ天頂に限なき星の光りを

## 白子れい

われの日々

・洛

ひとり居のわれの行く末案じたる教え子ホームのパンフもて来る  
 ホームに働く人の所作にも言葉にもこころの深さ滲み出ており  
 見晴らしも交通の便もよきホーム居心地よさそう でも今はまだ  
 大輪の一重木槿の白き花凜とひらけり独り住む庭  
 センセーイと過る自動車より手を振り誰ともわからず吾も手を振る  
 教え子に曾ての保護者に庭の花に支えられいるわれの日々なり  
 命令を発するなくして受くるなき独りの生活風やわらかし

## 橋本曠子

宮本憲一先生

・伴

学士院賞御受賞の知らせ届きたり。宮本憲一先生 萬歳!

環境経済の学極め 国内外の環境問題につくされて来ぬ

かつての日「水俣れくいえむ」上梓さる。水俣の女の歌を蒐めて

天くして水俣病で歿くなりし女の遺せる うたの清しさ

またの日はヴェネチアにお伴して ヴェネチア大学での環境会議に

会議なすヴェネチア大学の窓へには ひた打つ波の音のかそげく

パリの朝 モンマルトルの墓地たづね、サルトルの墓にも詣でぬ

ぱぱりょうこ　逆説

・鹿

檜垣美保子

夏日

・昴

また犬のおうたと言われたるなれど愛娘たるもの逝かせて二年の  
ビーグルを看取りし夜半は月満ちて金の竿のとめどもなけり  
甘噭みの記憶を遺し右の手で汝が哀悼詩をいまだにつづる  
長電話に焦れてスカートを引張りし犬との写真みやりつつTEL  
燕尾服の集団の演奏おわりたり つばめの尾っぽをゆらして一礼  
知らなかつたあの谷底に一軒があつたなんて 台風の戦ぎに  
逆説を放ちたるなれど相手には通じるよしなく恨まれにけり

浜谷久子　ギア

・地

真夏日となる日計報の続く日を熱出すおさなの命が赤い  
人間の命が育つ瞬間を見せるおさなの戸惑いの目は

二時間草取りをして昼までをのそりと過ごして夕暮れが来る  
縁ある人の安否の知らぬ間に大きく変わる往き来なき間を  
ぐつたりと迎える夕暮れまだ今日の時間が残るギア入れ替える  
そよりも吹かない風の猛暑日の運動止める脳髄手足  
軽トラの二十五キロが走る町そんなもんと美容院あるじは

浜本美美

・紅椿

・夢

福田庸子

水滴

・今

花の黄をのこしたまま弧をなして反りたる胡瓜日盛りに揃ぐ  
鉄柵の黒にからまり巻き締めてヘクソカズラのその左巻き  
真夏日の赤ん坊の真裸につる草を飾り写真撮る父  
八月の丘のぐるりを男らが終日刈りてはげしくにおう  
やぶこうじ実をつけており夏の日の木かげにかたくあおき照りもつ  
ほろほろとますぐに嘆くそのひとのことばのかなし 蝶しぐれ止む  
泣きながら兄責むること聞こえきて朝の路地を北へすきゆく

藤川和子

日輪

・眉

いつの間に人は遠のき振り向かず草猛るまま夏の川あり  
井戸の水届く蛇口にいくつもの光る水滴夏を呼ぶ朝  
山椒魚の子がまぎれくる沢水を引きて暮らしし祖父達の日日  
若きらはペットボトルの水よくか水源地なるも回収日の嵩  
バーべキューのみに親しむ川となり水辺に寄らぬこの頃の子ら  
整備されて勢ひ深く伸びる田は飼料米とぞ白き旗立つ  
穂ばらみの進む朝の青田原旗がいくつも今年の夏ぞ

国内の其処ここ殺人、詐欺、放火　何時からこんなにっぽんとなる  
陳腐とうことば渦巻くわが頭上低空飛機の速さかりゆく  
芝の上枯葉と見紛う小雀の足とられつつ歩むおかしさ  
障子一尺あけて眺むる初夏の空鳥影さえもああよきらざる  
世の中の進みて何かが欠けゆくも草木はかわらぬ花を咲かせたり  
おみなへの心遣いの巧みなりし師のいしぶみと紅椿

藤田美智子

胡桃

・新

松浦禎子

無縫坂

・羊

九十度のお辞儀をされて店を出づ下げる頭の背につきくる

活字読む一人の同志を見つけたり向かひ座席の七人の中に

平らかな流れと見ゆる大川の橋の下には小さき渦まく

固き殻を持ちつとも薄き皮まとふ用心深き胡桃がひとつ

犬猫が苦手を共通項とするわが家族みな甘えん坊

貰めたるのちを長き沈黙の続きたり玉ねぎにほふ中指を噛む

「思ひ出すかきりその死は来ない」とぞ子のなかに父はまだ生きてゐる

船田清子 行く先告げず

・天

時計草・モミジバ朝顔汝とわれ愛でしも翌年芽吹かず過ぎぬ

ゆくりなく逢ひたる雨後の時計草裸々たるを君に見せまし

大いなる穴暗々と口を開け行く先告げぬ君を間へと

キスしたし冷たき煩へ ドライなるわが眼に満ちくる熱きを注ぎ

わが胸にいたきしめたき衝動にかられつつ置く百合の花束

朝夕を写真にに向かふ身の内へ突き上げてくる黒き潮の

「なさけない」聞きとりがたきつぶやきに君の無念の行く先を追へり

牧雄彦

暗黒物質

・大

うつしゑの笑顔に向かひてわれは言ふ浜田さん悪い冗談はよせ

たましひの抜けたる顔は君ならず目を開けよそして声かけくれよ

宇宙論目をかがやかせ説きゐるに解らぬわれらただにうなづく

君が極乗せたる車は畜場を出でて左へ消えてしまひぬ

唐突な訣れを今もうべなへず夏の日盛り畜場を出づ

滔滔と理論を述べし君は消ゆ浜田昭則七十五歳

今ごろはダークマターに近づきて宇宙游泳してゐるか君は

昼の空見上げ立ちたり両側の並木のさわぐ白き八月  
葉のみどりふかるるみれば木のちから時なるちからただ仰ぐなり

紫外線遮断し重きカーテンを閉させば夏の暗きほころび

夏柑のひとつ残れる島の丘見の限りなる葉月あたらし

遠くまでキャベツ畑のただ見えて音のなき屋怖れともなふ

終点をもつ確かに軌道音長きトンネルいまし出でたり

仰ぎみる空にうつすら浮かび出でそのまま雲の消えてゆきたり

三浦好博

夕つ日

・銚

真すぐな街の道なり信号の一斉に青の先の夕つ日

生活の苦労滲ませ帰りゆく子を見送れり宵き霧の夜

死ぬことは君よりひと足先に逝くそれだけのことのそれだけ

ナマモノに飢えたる駄か大物の蜘蛛姪へ横切り行けり

エンジンを止めて汗ふく刈り残す梶花ひとむら良き色に咲く

いくばくの我が汚れ血を蚊に与へ勢ひて伸びる轟を払ひぬ

四十年商ひとふ店を閉づアベノミクスを信じし友が

宮本 靖彦

六甲山

・凌

もとむらしげと

オリエンピック

・そ

六甲山に届なせる雲巻きあぐる日の柱立つ今し梅雨去る  
 遠霞む六甲連峰馳せゆけば我がものとなる阪急神戸線  
 沐然と夜梅雨の降れば冷風の魔女のごとくに窓より入り来  
 胡瓜盗る泥鰌鳥と日が合ひぬ老い羽色に石を投げ得ず  
 蟬声の高き朝空青極む昭和のドラマに励まされゆく  
 車内にもポケモンの居て若きらの動き諾ふ画像を見れば  
 新しきスマホならばポケモンGO追へすと聞けば夏日のきびし

三 好聖三

かな?

・伊

夏休み子ども科学電話相談の答えに悩むひとりではある  
 さざなみの寄せ来るところの大人も子どもも着衣で泳ぐ  
 「國家」とは「汝の利権」にはかならぬなど思いおりこのころ頃につまみ食いしながら雨の日を過ごすイジドール・デュカスやランボーの毒戸を閉めておのれひとりの部屋とする不穏な書物に付き合う夜はよきことのひとつと言えさてさて妻の午睡のしどけなさかな  
 瑞穂色の瞳を回す猫が跳ぶセシルカットの少女の背中

御代田澄江

凌霄花

・茨

捩花の一本螺旋階段を咲き上りゆく風に揺れつつ  
 地球自転に従ひ曲がり捩花はさゆらぎ昇る宙のきさはし  
 小雨降る義妹の一年忌弟は懇に祀る涙を見せず  
 義妹は姫の命黄泉へ導く禰宜の祈禱の言葉美し  
 在りし日に花咲かず来し吾が庭の凌霄花初に花見す  
 高々と凌霄花の花咲けば夫に見せむと活けて供へぬ  
 「花は咲く」ばかり歌へるNHK苦しくなりてテレビを消しぬ

八乙女由朗

百日草

・柴

種蒔きて育てあげたる百日草あどけなく咲きて長いのちは  
 蔵王嶺より吹きくる風を受け止めて枝葉豊かに繁らす矮鶴椿葉  
 忙しく空移りゆく白鷺多し南へ低く北へは高し  
 TPPにかかわり無けれど舗道に農機が落とし土片付ける  
 B29三機墜ちたる蔵王嶺に平和公園成りぬいくさは悲し  
 いまだ離せぬ愛車のありて通うなり前車に従きて登る坂道  
 カレンダーはがし忘れて数日を涼い居たり倚らず生きたり

山下雅子

名残

・習

磨かれて紳士靴あり亡き人の暮らしの名残ここにただよう  
 ありのまま生きんと思う軽き身を夕日の照らすわがかけ著し  
 「八十年生きればそりやああなた」いねむりにああ史文史の声が囁こゆる  
 胸の上に手を組み眠りいし姿ゆくりなく湧くかなしみ褪せず  
 人気なき社にひんやり汗のひくこのさやかさにたゆたう昭和  
 ペンとれば久なる思いあふれ出ではがき一面書き尽くしたり  
 「肥後守」に削る鉛筆HBの消えていつよりBのみとなる

横田敏子

玉葱

・福

朝井恭子

リハビリ

・森

冷蔵庫の奥より出できし玉葱の芽が伸びており「生きているんだ」

抜きたてのトマト棘棘ある胡瓜売るおばさんの震災後を来す

炎天にフレコンバック呼びいん今年の夏はもう限界と

声無くば意志なきものと無視されぬ声上げゆかん改憲反対

卓球に流すこの汗心地良し化粧崩れの顔がてかてか

ピール祭開始の花火上がりたり勤めし頃はジョッキで飲みき

連日の猛暑に歌の出来ぬ吾を急かすとばかり花火の連發

### 吉内尚彦

軽井沢

・浜

飯田勤苦瓜

・む

杖つける重き足取り励ましの一語に軽くなる軽井沢

難聴に確と聞きたりまた一人「あなたのうたを愛読してゐる」

朝露の消えぬうちにとイナゴと田にいまイナゴ見ず

いにしきのいくさを偲ぶ姉川に小魚キラリと刃の光

三世帯同居となりぬ夫々の生活の波を襖が防ぐ

独房に犬は終身禁固刑ドッグフードをがつがつと食む

高校生の家電新案コンクール熱き思いの産む風涼し

### 吉永惟昭

妻の被爆日

・熊

石橋美年子

声

・華

豪華なるオリンピックの幕啓く蝉は鳴けども古りし被爆忌

ヒロシマがリオのサンバに呑まれゆくそれでいいのだ妻はヒバクシャ

人類の矛盾の極みキノコ雲あの色・形妻の被爆日

肌で知る人なくなれば原子野が忘れた頃にと蟲の囁き

折鶴に永遠の平和の祈り込め止められまますかピカ・ドンの業

被爆妻黙せしがまま色褪せし茜蜻蛉と歩る夏川

被爆忌の見舞に秘めし些の慕情が舐める切手の渋味

季すきしあじさいの花の寂びいろをわが心処の色と思えり

「トリックキーな転び方です」と老医師は肩関節の骨折を告ぐ

百日を咲き継ぐというさるすべり我も百日リハビリ通い

真夏日を咲き盛りいる夾竹桃赤き花殻ほろりと零す

紅白の夾竹桃の並び咲く景を横目にリハビリへ急ぐ

新築の消防署前に植えられし百日紅の花色淡し

うぐいすの声を压して裏山にみんみん蟬の合唱起る

磯田ひさ子

猫

森

上田吟子

オホムラサキ

鳩

ケアホームに入所のはがきいただきぬ九十二歳の貴なる人より  
こゑすらも細く言ひさしホームへの入所ためらふ電話のありき  
独り身を貰き通しいつの日も猫をかたはらに置きしうたびと  
気のきいた猫ではないが頼もしと言ひるしが猫はどうしたのだらう  
何よりも猫との暮し断ちがたく長く独り居を続けたりしか  
二十一に及ぶ歌集のすみずみに作者とともに猫のうたあり  
われを出す歌は極力つしむと十年前に言ひしを忘れず

市原志郎

夏日

萬

奥田清和

時のはさま

大

毎日の夏陽をさけているところクーラーの下定位置となる  
キラリ光る針先に朝の陽が動く血糖値下げて一日始まる  
孫らクラブと言いて夏の休みの中朝早くより出掛けしという  
妻は出掛け孫の一人と留守番となりて互いに目を合わせいる  
夕食後食べるを楽しみとしておりぬ西瓜は食卓の上にて赤い  
くだらない歌創り乍らひそひそとわれの生命をけずりておりぬ  
つるのみが伸びていたりし朝顔に今朝一つだけ白き薺が

市原やよひ

蟬

萬

奥田陽子

若き声

羊

穴ぼこに蝉の抜け殻詰められて公民館の庭静かなり  
集められし殻の数と同じかと紛うばかりの蝉しぐれ降る  
もしやこれ蟬の墓場を作りしか子供等の影どこにもあらず  
電柱の細き影に身を隠し信号青に変わるを待てり  
信号待ち向かいの人を眺むれば自転車自転車傘傘帽子

我が背丈半分程の影つれて真夏の横断歩道を渡る

写真付き証明書あるかと問われたり期限の切れたパスポートです

木もれ陽の苦に光りてゆらぐ丘オホムラサキをとばす子ら見ゆ  
甘樅丘に放ちしオホムラサキ羽をふるはせなかなか飛ばず  
うろこ雲空いつぱいにひろがりてこぼれ落ちさうな空を見上げる  
大空と雲に挨拶をしてひと日はじまり「上山仰ぐ  
ひと日なか空みてゐると飛行機のやつと一機のとびゆくを見る  
さざなみの寄せては返す音きこえベッドはただよふ吾のゆりかご  
梅雨しぐれひさびさに降り部屋のなかひんやりとした風吹き通る

ケイタイもあらず街道わたりゆく弥次喜多の世の情恋ほしむ  
惻隱の心失せたる末世には竹のひかりの姫など生れず  
衣食足りて礼節を知る教へ今は移りて廃棄食何トン  
朗朗と古今の名文そらんじて獺祭にあるいま都人  
めしひ来て晴耕雨読の夢去りぬ大宮人は桜かさせよ  
古語にいふ「寿」ければ恥多し肯ひそめし宴のはさま  
民主とは時間のかかるものぞよアメリカ帰りの老教授いひし  
逢いたきと言いつつ逢えぬ人ばかりプラックホールの時流れ去り  
忘れ来し貝殻いくつ時おりを掛かる電話は海の街より

## 小野雅子

梅雨

・羊

夕暮れの池のおもてに水脈ひきてマスゲームのやうに鴨の遊べる

仁丹の匂ひしてくる通勤の車中に似合はぬ者としてゐる

ミアンマーの女が衣装にすると買ふ大き花柄の布団の布地

二畳に住み月三十万円貯金して若き男の起業夢見る

路ぬらし心も濡らす梅雨のあめ水源地には降らないといふ

雨の予報すぐ信じて夕刊はビニールの膜まとひて届く

やんだのにまた降つてゐる朝顔も萎みきらずに今日は終らぬ

## 柏原宗一

結束バンド

・羊

くら間の中に停めたる車より結束バンドの数をかぞへて  
かの人ら生きる値打ちの無き故に葬るべしとやみの中の声  
施設に働くうちに思ひけり障害者たるは生きる価値ありや  
がんこなる手にしきほへばこれはまた結束バンドは効なきままに  
つづまりは何を恐る証かと常に思ひき消さねばならぬ  
映像に常に笑へる顔をもち人をばこぼち葬るさなか

変人が理屈を言ひて何とせう、暗やみに人を廃するすべは

## 菊岡栄子

仲間

・漣

朝毎にジューングリーに集う鳥病みたる吾は眺むるのみに  
午前四時薬のために起き出でぬ眠わう鳥の囁くばかり  
桃の実は袋も被せぬこの年の皮肉に一個赤く色づく  
紫陽花は昨夜の雨を吸い込みて花穂なべて俯きて咲く

ラズベリーはためはために実の熟る今年の夏の楽しみうすし

外出のままにならざる身となりて短歌の仲間に逢うを待たる  
嬉しいな明日はみんなと逢える日よ短歌の仲間と長き付き合い

## 草刈十郎

花筏

・世

春愁もふとぶごとくテレビには熊本地震の惨状映る

花終り花見心にけじめをばつけることくに雨降り初む

風に舞ふ桜吹雪の華やかさ美は乱調の中にこそあり

小さき平和乗せるごとく流れゆく小さき川の花筏かな

菓舗の前素通りできぬ娘と孫の思ひは同じ桜餅なり

老いわれらつどひ春宵のひとときを故人ばかりの映画みるなり

余震すでに千四百余統くとふ短夜区切る不気味さ思ふ

## 國井節子

合歎の花

・春

合歎の花咲けばえつちやん思ひ出すピンクの衣裳のあのフラダンス  
慈母観音へ祈りは深しこの山のどこかで君に逢へる気のして  
木にすがりけんめいに鳴く油蝉みじかき命の声のかぎりを  
たをやかに白く咲く花仙人草薙効のあり毒もありたり  
ひさびさにボールで遊ぶ子らに聞けばゲームは肩が痺るからあかん  
「歩く会」ながく続けて歳老いて名のみ連なる膝を痛めて  
大方は乗り物に乗る「歩く会」優待券にて座してゆきたり

## 小泉泰清

妙音離れず

・う

いま生るる朝の光に目を細め眩しみひと日の幸を願ひぬ  
氣ののらぬことより切りかへ好きなものにのりうつりたし夕べ暗きに  
祭囃子の練習はじまり窓べより浮き立つ楽に血の騒ぐなり  
若きより囃子連に携はり調べに今も腰の揺れ出す  
神輿に添ひ囃子奏でて町廻り足弱と老いに今や叶はず  
町内の祭事役員つとめきしをかへりみながら子に譲るなり  
生家より転居せしことなかりせずはすいきんくつの妙音離れず

河野繁子 相手

雁

今年また芽生えて花咲くメハジキの遊び相手は年かさねゆく  
屈強な男の子にまじり興じたる面子に肩の痛む夜ありき  
花終えしキツネノカミソリ暑き日に今から咲くよと遅き一茎  
おさなくて親と別れし死生観すこし違うがひとには言わず  
六十年共に生きたる標にと墓碑銘「縁」と心に決む

地震にも倒れぬ墓を横長と決めておれども もう少し後  
ほんの少し自由の欲しき私にお構いもなく言葉飛びくる

小西美智子

隣家は消えぬ

大

五人家族の三十年を端で見し人」とならず隣家の引越し

三人子の巣立ちしのちの老夫婦ペットの大とマンションに越す  
末の子の飼いはじめたる犬も老い夫婦とともに越してゆきたり  
朝九時をまわれば雌大キャンディがやさしく吠えぬ「洗濯屋さんよ」  
取り壊す音は身内にまで響き隣家は消えぬ十日あまりで

雨やみて薄日さしくる桜樹にいっせいに鳴く蟬声高し  
シマトネリコの花うすみどりにうつりつつ戦の果てし八月に入る

小林能子

佐久の道

羊

大会の余韻かここちよき雨の軽井沢より佐久へと向かふ

募金箱かばひて雨の紫陽花のロータリーに立つ高校生ら

「火の山」と浅間を詠みし歌びとは君らの先輩生徒会長なりき  
碓氷峠越えて東京往還の辛艱の中に昭和ひとけた

青空のかなたを友は風に座し牽きゆく雲の蒸気機関車

千曲川わたらねれば五郎兵衛新田の沿道にティイジー群れ咲く五月  
中仙道佐久の道を来て茂田井宿しづく蒼き酒林見ゆ

近藤栄昭

水の塔山

福

登山口は標高二千四百「ランプの湯」降りつぐ雨へゆるると出る  
降りづく水の塔山雨粒がほほに当たりてあごに垂れゆく

細き水流れるリズムに登る道足は反射すればむ小石に  
雨の打つフードの振動つよからず心静まる見えぬ頂上

夏はてて盛りし花の草色に雨色になる時雨に打たれ  
止まず降り雨具舐めゆく秋雨は体温下げる腿肉冷える

「ランプの湯」雨ふる外に下野草結露ふくらみ紅ながる

近藤芳仙

若葉風吹く

信

若萌えの色やはらかに迫りくる山を見てをり術後一月

若萌えの山の幾重に迫るゆゑ力を込めて梵鐘をつぐ  
わが歩みここにとどまる姫女苑土手いつぱいに山の径ぞひ  
川風の甘きかをりにしたがふにアカシアに寄る蟬の翅音す

大地震に傷む熊本わが阿蘇の地平の緑いまだはるけし  
葉桜のおぼへる間の内と外ひよの出入りは終日つづく  
緑濃き葉裏かへして吹く風を山は去なして微動だにせず

久我田鶴子

にいにい蟬

羊

南風つよき海岸どこにでも行けさう 雲が早く流れる

尻さきに音質調整こまやかに晴れ間を鳴けりにいにい蟬は

にいにい蟬のこゑ真空になるときを梨の古木が薄目を開ける

「低く長く单调に鳴く」とは辞書の言にいにい蟬けふ勢ひて鳴く  
葉の上に大なめくちは動かざる大牛のうごかす触角

夜氣を吸ひ梅干しの身のやはらかし濡れたるやうにひかりさへする  
桃の実のくびれに沿つて刃を当ててねぢ割る感覚すでに知つてゐる

## クリップ

■本社への連絡について

葉書が封書でお願いします。

電話はあります、常駐する者がいませんので、誰かが作業の

ために本社に行っている時にしか通じません。急を要する場合には、藤森か久我までご連絡ください。

・藤森…田 090-8301-6423

・久我…田 & 森 043-241-7925

■歌稿を送る際には

クロネコメール便の廃止に伴い、ほとんどの方が郵送に切り替えてくださいました。ただ、

レターパックは困ります。本社

の郵便受けに入りません。再配達の依頼をしなければなりません。

■歌集の批評号等、余分に本誌をお求めになりたい場合には、

一冊100円(送料込み)で

受け取る者が常駐しておりますので、その点をご理解ください。

編集作業に支障のないように、

■入退会届について

葉書に、①氏名(ふりがな)

毎月の原稿は締切日(毎月十日)

に余裕をもって郵送してください

いますよう、お願いいたします。

■見本誌について

勧説用に見本誌をお求めになら場合は、代金は不要(当月号を除く)です。ただし、送料は

ご負担ください。

これまでメー<sup>ル</sup>便を使って

お送りしていましたがたが、今後は郵送に切り替えます。ご負担

ただく送料は、「一冊までなら

二〇〇円です。お申し込みの際

に、一〇〇円分の切手を同封し

てください。

なお、三冊以上については、

今まで通り着払いの宅配便でお

送りいたします。本社宛にお申

し込みください。

■歌集の批評号等、余分に本誌をお求めになりたい場合には、

一冊100円(送料込み)で

受け取る者が常駐しておりますので、その点をご理解ください。

■入退会届について

葉書に、①氏名(ふりがな)

②住所③電話番号④生年月日

⑤性別⑥送本開始月(退会の場合には送本停止月)を記入の上、

支社・グループ長より本社に提出して下さい。なお、編集作

業は二ヶ月前から始まっていますので、いきなりの送本停止に

は応じることができません。ご

了承ください。

■会費納入について

会計年度(四月～翌年三月)

に合わせて、半年分、または一年分前納でお願いします。各欄

の月額は次の通りです。

・A欄 100円

・B欄 150円

・C欄 100円

・購読 100円

振替は「00160-4-179569

地中海社」振替用紙の連絡欄

に内訳をお書きください。支社・

グループでまとめて半年分、一

年分を納入してくださると助か

ります。内訳が連絡欄に書きき

れない場合には、ご面倒でも本

社会計宛に別便でご連絡ください。

なお、途中で退会されても既に

納められた会費は返金いたしません。送本停止の申し出がなければ、会費を納められている月

まで本誌をお送りいたします。

ご了承ください。

■叢書番号について

歌集を出版される方は、①歌

集名②版元③発行時期を明

記の上、本社宛に葉書で叢書番

号をお求めください。折り返し、

事務手続きと合わせてご連絡い

たします。

■本社の窓口はいつも開いてい

ます。遠慮なくご相談ください。

ご意見その他もどうぞお寄せください。

●十月・十一月の本社予定●

10月4日(火)～11月号校正

10月17日(月)～12月号編集

10月22日(土)～神田歌会

11月2日(水)～12月号校正

11月16日(水)～1月号編集

11月26日(土)～神田歌会

私が沖縄に行くことはそれ以前に決まっていたのだが、その旅は出演してくれそう人に話をすることが半分くらい目的になってしまった。地中海の沖縄在住者、大学の卒論で「桃原邑子論」を書いた人、桃原邑子の友人で紅型作家の人と会って話をし、他に出てくれそうな人の情報を仕入れた。

沖縄から帰つてから番組制作会社の方に沖縄での感触を伝え、

あとは直接沖縄の人たちと連絡をとつてもらうことになった。

結果的には、声をかけた人たちの中から松瀬トヨ子さん、仲西

正子さん、かつて地中海の会員だった比嘉美智子さん達が出演された。

それから、桃原邑子の実の妹である山根トヨさん、桃

原良次・佳子夫妻も。他に、番組を陰から支えてくださった方

も大勢いたにちがいない。

放映された番組を見て、良かったと思った。桃原邑子を知らない人にも知つてもらおう大きなきつかけになつたのではないだ

ろうか。誠実な番組制作をしてくれたことに感謝したい。

最後に沖縄の子ども達が歌つたのは、「南風の花」。桃原邑子作詞、岩代太郎・矢井田瞳作曲・補作詞、岩代太郎編曲。桃原邑子の短歌は十一首入っている。

・パパヤの花が無風に散つてゐる、ふとあなたの額に手をあててみる

・パパヤの葉のすきまから大空が流れてきて、日曜の朝の幸福がある

・くちなしの花弁は黒く枯れました 生命散らせし宵のかた  
みに  
・花のいろ 朝焼け夕焼け月のいろ 血のいろなれば 眼を  
つむりるよ

・夕日赤く 海をも空をも地をも染めうたふ挽歌よ この死者のため

・むくろなる 母の乳吸ひ 幾日を 生きし幼か まなじり  
閉ざせり

・嫁わきに 血塗られてありしを顕たせつ冬庭を灯す石蕗の花

・撃たれ死に 焼け死に 飢ゑて死にゆきしひと 重なりて  
戦ひやみぬ

・死者たちの かばねをいよいよ赤く染むる 森の朝焼け  
海の夕焼け

・人間の 罪の如何とかかわらず 殺めあふことを 戦争と  
呼ぶ

・いのちいとほしみ、ほそぼそと老いてゆく愛しい影像よ、  
私は静かに合掌する

岩代浩一氏が歌集に印をつけていたという歌を活かしつつ、息子の太郎氏が選んだものだろう。沖縄の自然を入れ、戦争の事実を平和への祈りにつなげようとする。小学生が歌うには難しいかも知れないが、いつかその意味を明らかにする日があるだろう。今はよく分からなくても、いつか分かる日が来る。その未来を信頼し、これから育ちゆく者たちに未来を託した歌でもあつたろう。番組の中で使われていた桃原邑子の写真は、優しく微笑んでいた。没後十七回忌を過ぎて、こういう日が来たことを喜びたい。テレビ番組だけで終わらず、この歌が静かに歌い継がれてゆくことを心から願つてゐる。

番組の終わりにテロップに、協力「地中海」とあつた。

## 『香川進研究Ⅱ』ご案内

### 1) 続・歌集論（『香川進全歌集Ⅱ』所収歌集）

- ・『天霧山』 … 浜谷久子
- ・『隠岐』 … 磯田ひさ子
- ・『葬送』 … 牧 雄彦
- ・『神武天皇』 … 浜田昭則
- ・『野川』 … 関根和美
- ・『野川以後』 … 高尾恭子

### 2) 香川進論 1

- ・戦後「詩歌」と『水原』 … 久我田鶴子
  - 短歌否定論と前衛短歌のはざまで—
  - ・「死」について … 藤森巳行
  - ・死と隣りあう日々の果てに … 滝田靖子
  - ・男女に関する歌（『湖の歌』より） … 玉井綾子
  - ・一首鑑賞「男性は悲しくして」 … 玉井綾子
  - ・香川進の「前田夕暮論」について … 久我田鶴子
- (付) 香川進の「前田夕暮論」一覧（執筆時期と場所）

### 3) 香川進論 2（「天平通信」第百号より 平成17年11月20日発行）

- ・香川進の墨蹟による「代表歌百首」選 … 船田敦弘
- ・香川進〈天霧山〉のうた … 松永智子
- ・『隠岐』に見る「白きともしび」への軌跡を辿る試み … 船田清子
- ・香川進の断片私感 忘れられない一首 … 浜谷久子
- ・香川進歌集『隠岐』を読む … 田土成彦
- ・『神武天皇』について … 柴田登志恵
- ・『野川以後』の歌鑑賞 … 小野雅子
- ・絶筆とともに … 田土才恵
- ・拘りひとつ … 垂名恒治

### 4) エッセイ、及びノート

- ・香川進先生隨伴記（1）～（12） … 柏原宗一
- ・没後17年「なお蘇る、在りし日の香川進」 … 吉永惟昭ほか
- ・香川進の「白日社入社」をめぐるノート … 久我田鶴子
- ・（続）香川進の「白日社入社」をめぐるノート … 久我田鶴子

### 5) 寄 稿

- ・一首鑑賞〈香川進の歌〉 … 一ノ関忠人
- ・「香川進研究Ⅰ」に寄せて … 花山多佳子
- ・戦争加害者としての文学をもとめて … 阿木津 英

### 6) 資 料

- ・香川進初期作品（波川清・唐木明夫・唐木明の名前で発表）
- ・第一歌集『太陽のある風景』批評号（「詩歌」より）
- ・短歌の限界 … 香川 進
- ・源泉感覺論 —「詩歌」の立場に関連して … 香川 進
- ・「詩歌」における創造的精神（1）宮崎一夫について … 香川 進
- ・「詩歌」における創造的精神（2）小関茂について … 香川 進
- ・香川進論 一太陽の歌人一 … 山崎一郎
- ・書簡・小西久二郎宛

### 7) 年譜・改訂版

## 追憶

藤野喜美子

短歌と私

### 今月の二人

水玉の母の手縫いのワンピース香い記憶の砂浜をゆく  
クレヨンを想いのままに擦りては千代紙つくりし独りのあそび  
果しなき海原のぞみ語らいし友との夢も今は敢えなく

まっしづき入道雲はなにもかも承知のことき輝きを見せ

夕光の尾花の原に佇めるお伽めきたるわが影法師

八月の悲しみのごと俯きて凌霄花は赤く揺れいる

征きし父を語ることなく逝きたる母の白寿のすがた凧のごとしも

ひそひそと風運びくる薄紅のすすき草原なべて艶めく

憧れの文学全集五十巻開かぬもありて溜息ひそむ

贈られし友の手織りのマフラーにこころも温む今日誕生日

白金のくちなわのごと池の面の凍てたる氷紋は寒に勢う

冬原に日ざし広がるひとところ麦畑の青匂いそめたり

刈られたる夏草原の匂い立ち緑眩しき五月は來たる

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも  
染まずただよふ  
この美しい調べは折おりに私の胸に去来  
します。四方に海を望む石巻市田代島に少  
女の頃を暮らした私は短歌の知識もないま  
に、何か憧れの思いを抱きながら年月は  
過ぎました。

やがて佐久間辰先生から短歌の指導を  
いたく機会に恵まれました。地区市民セ  
ンターでの「短歌入門講座」の開講に参加  
して「短歌とは・短歌の歴史・作歌の例・  
添削の例・実作歌会」と教わり、今までに  
全く知らない世界に驚きとよろこびを感じ  
た事でした。

その頃佐久間先生はNHKラジオ仙台放  
送局の短歌講座の講師もなさっておりまし  
たので、「一般応募の短歌から入選歌の批評・  
添削と聴きました。まして自分の短歌がと  
りあげられた時のこころ弾みは七十代にし  
て初めての経験でした。「短歌入門講座」  
をきっかけに月に一度の歌会では歌謡の奥  
深さに触れ、会の皆様と共に心豊かな一時  
を過ごします。拙くとも歌を詠むことは自  
分に向き合い、表出の自分に遇うことで、  
今更ながら日頃の不勉強に恥じ入るのです  
が、「やさしさ」「こころ美しく」を常とし  
て短歌を詠む、の心を生涯持ち続けたいと  
思っております。

## 若き日

森川 淑子

六十年前から

# 今月の二人

聾盲のあたりの異常といふ病食の通過障害なにゆゑ

隣室に瘦せて背丈も似たる人入り来てすぐさま仲良しとなる

病室の修理に引越し詰所ごと四人部屋での共同生活

金曜日学校かへりに友の来て世間のかをり運びくれたり

病院の中には人と世の裏もあらはに見えて厳しさを知る

新薬もさまざま試せど変化なし手術は難しと胸部外科は言ふ

年の瀬も近しとひとまづ退院す帰るうれしさ恥づかしきほど

何もせず時がどんどん過ぎてゆく無氣力にただ生きてゐるのみ

姉の友、祖父と統きて逝きたるにこれほどしんじいわれはまだ生く

芸術にもらふ力は何ならむ美術、文学にこころ安らぐ

音楽になにかが開くふうわりと春の花園に行くこことせり

体力の足りぬといへど時折はそろりと外出映画にも行く

以前より願ひし手術可能といふ速やかに外科病棟に入る

T・マンの『トニオ・クレーゲル』に感銘、『魔の山』を高校の図書館で借りて興味深々色々と想像していた私。保育科の短大への通学は五月まで。兆候は感じていたが、まさかの入院生活が社会の始まりとなる。十万人に一人くらいの症例、バリウム透視で北浜の湯川胃腸病院に診断された。知人から大学病院への紹介、湯川方もよし。放射線科、食道鏡検査は耳鼻科で苦しむ。常に絶食での検査、医療機器は医局で試す。内科は患者の出入りあり、遠くからも。炊事場はガス水道共同で、家族、患者らは煮炊きする。病院食は貧しかった。ここにはいっぱい欠けているものがある。何か楽しめることは聞きたい、心の触れあう、魂に溶け入るような話を聞かせてほしい。あの頃に短歌を知っていたらと思う。

三年余の後、手術をする。退院後の不調に再入院する。噴門は成功したが、癌着で要再手術。一年もたずが大吐血、臨死体験もした。四度の入院、三度の手術で甦る。多くの方々にお世話になって、今の私が生きされている。感謝して余生を自由に、皆様との短歌の交わりを喜びとし、作歌も楽しめるようになりたい。身の上話をおしゃまにする。

## 入道雲は何もかも承知

仙台市にお住まいの藤野さんは、少女時代を石巻市田代島で過ごしたという。あの大地震の時、島はどんなだったのだろう。

・水玉の母の手縫いのワンピース奇い記憶の砂浜をゆく

おそらくは物のない時代に、母が娘のために作ってくれた水玉のワンピース。作者のお気に入りだったのかもしれない。着ている「わたし」を出さずに、「ワンピースが砂浜をゆく」と表現したところ、間接的に母への感謝の念が伝わってくるところも、この作品の美点だと思う。

・まつしるき入道雲は何もかも承知のごとき輝きを見せ

夏空に立ちのぼる真っ白な入道雲。それは何もかも承知といふ輝き方をしている、というのだろう。結句の言いさしも含めて、詩の断片のような歌。少女時代の思い出なのかもしれないが、今もこの感性が作者の中に生きているのちがいない。

・征きし父を語ることなく逝きたる母の白寿のすがた虱のこと

しも

出征した父が帰ってくることはなかったのだろうか。夫のこと語ることなく戦後を生き、長生きして亡くなった母。作者はその母の白寿の姿を「虱のこと」と詠っている。母の人生への深い共感と労いの念とが「虱」の語に現れる。

・冬原に日ざし広がるひととこころ麦畑の青匂いそめたり

冬空の明るい広がり、地上には冬原の広がり。日ざしの及ぶひととこころ、そこだけ明るい麦畑の青。その青が、日ざしの中に入り込む。視覚と嗅覚とが活かされた冬の叙事詩で、調べもまた美しい。

## 音楽になにかが開く

評者・久我田鶴子

大阪、豊中市にお住まいの森川さんは、若い頃に入院を四度、手術を三度されたという。

・脅育のあたりの異常といふ病食の通過障害にゆゑ

「脅育に入る」と言うが、「脅育のあたりの異常の病」というのは、心臓の下、横隔膜の上のあたりで、はつきりどことも特定できない部分の病であったのか。医者も手当で苦しむような……。短大に入ったばかりだった森川さんの不安や閉ざされた思いはいかばかりであつたか。

・金曜日学校かへりに友の来て世間のかをり運びくれたり

金曜日になると学校帰りに立ち寄ってくれる友。閉ざされた病室の中に「世間」を運んでくれる者として心待ちしていたことだろう。世間の「かをり」としたところに、作者の憧れ、待ち望んでいた心がうかがえる。

・病院の中には人と世の裏もあるはに見えて厳しさを知る

入院中に見た人の裏側、人の世の裏側。それは具体的にはどんなものだったのだろう。狭い病院の中で、逃げようもなく見せられるそれらに、あるいは世間にいるよりも早く厳しい現実を知ることにもなったのだろう。

・音楽になにかが聞くふうわりと春の花園に行くこちせり

若くして長い入院生活を余儀なくさせられながら、「何もせず時がどんどん過ぎてゆく」思いに焦燥感を持つこともあった。ちがいない。そんなときに心を満たしてくれるものとして、音楽や文学があつたという。「音楽になにかが開く」は、その時の作者の実感だったことだろう。